

審査報告書

申請者： 呂 其俊 (LU QIJUN)

学位の種類： 博士 (文学) (甲)

論文題名 『トゥカン三世の生涯と思想』

(1) 論文の特色

第1に、18世紀のアムド地方、チベットのウー・ツァン地区、モンゴル、清朝を包括したチベット仏教の世界を明らかにしている。従来トゥカン三世は『一切宗義』の作者としての価値しか与えられていなかった。世界のチベット学会は同書を通じてチベット仏教の各宗派の思想を詳しく知ることができたのである。ただ、トゥカン三世はアムド出身で、チベット中央に学び、清朝の北京にホトクトという僧官として駐錫した人物である。彼の生涯を辿ることで、申請者は18世紀の、チベット、モンゴル、中国内地の「チベット仏教世界」の状況を明らかにしている。これは現在、早稲田大学の石濱裕美子教授らの進めている「チベット仏教世界の形成と展開」研究の一助となるものと確信する。

第2に、申請者はトゥカン活仏がチャンキャ活仏と共にアムド地方を政治的に統治した様子を明らかにした。彼は多くの寺院を建立することにより、部族の信仰を集め、それにより清朝の政策を実現するという、政教一致の政策をとっていた。トゥカン三世は18世紀の清朝の有名なゲルク派の僧官として清の駐京ホトクトを務め、3回上京した。その間チャンキャ国師および各駐京ホトクトと密接な関係を保っていた。彼は、モンゴル族やチベット族、五台山、承德外八廟、および北京のチベット仏教の掌握に重要な役割を果たした。広大なモンゴル地方とアムド地方の各部族から絶大な信仰を集めることにより、清朝のモンゴルやアムド地方支配に大きな貢献をした。本論文では、『理藩院則例』、『乾隆上諭檔』などの清朝の歴史文献を踏まえ、トゥカン三世の伝記を中心に、トゥカン三世の視点から清朝のチベット政策とゲルク派のアムド地方布教の様子を解明している。これは大いに評価できる点である。

第3に、申請者は、トゥカン三世の『一切宗義』「儒・釈・道の章」を日本語訳し、チベット人で初めてチベット語を用いて漢民族の文化である陰陽五行思想、儒教の哲学、道教の哲学、中国仏教などを記述した同章の内容を日本に紹介した。チベット文化の視点から、漢民族とチベット族の間の文化交流の実態を明らかにしている。

第4に、クンタン三世のトゥカン三世の伝記を底本とし、トゥカン二世のチベット語の伝記、チャンキャ三世のチベット語の伝記、一切宗義などの関連資料を参照し、また清朝の中国語の歴史文献や日本語の先行研究を踏まえて、初めて詳細にトゥカン三世の生涯と思想を研究し、紹介してい

る。申請者は中国の大学院を修了し、チベット人の教授からチベット語、およびチベット仏教を学んだ。さらに最近の中国におけるチベット研究の動向調査も行っている。さらに日本に留学して以降、日本人によるチベット仏教研究を学び、さらには欧米の研究内容も遺漏なく調べている。従来の中国内部でのチベット研究の実態、研究の方向性はいま一つ理解できない点が多かった。申請者を通して、今後チベット仏教、清朝のチベット仏教政策、モンゴル、チベット政策などがより一層明らかになるものと期待する。

(2) 論文内容の要旨

トゥカン(thu'u bkwan) 三世ロサン・チューキ・ニマ(Blo bzang chos kyi nyima, 1737~1802) は清朝の駐京ホトクトであり、その間、アムド地方のゴンルン寺(佑寧寺)、タール寺、チャキュン寺のティパ(法台)を担い、仏法を宣揚すると同時に多くの作品を著した。彼は、チベット仏教史上有名な仏教思想家であり、歴史学者であり、文学者であり、政治家でもあった。彼は一生の間に多くの著書を残したが、特に『一切宗義』、『チャンキャ三世伝』、『佑寧寺誌』は注目され、チベット仏教の学僧や国内外のチベット学研究者によって研究されている。ただ彼を取り巻くチベット仏教世界、清朝のモンゴル、チベット政策に関する研究は不十分であった。

そこで申請者は、クンタン三世の『トゥカン三世伝』を資料として、客観的な態度でトゥカン三世の一生を詳細に検討した。申請者は、テキストを考証する上で「知人論世」と「略小存大」の評価態度を採用している。つまり、トゥカン三世個人を描きながら、彼が生きた時代背景を考察するやり方である。これは個という小に、社会という大が宿るという考え方に基づくものである。

同時に、申請者は2009年から2012年まで数回、チベットに滞在しトゥカン三世の活動拠点であったゴンルン寺、花園寺、土観村、鹿角哇寺、塔爾寺などの多くの寺院、修行地、さらには北京の雍和宮、黄寺、旃檀弘仁寺などの実態調査を行っている。これは本研究を進める上で大きく貢献していると言えよう。文献ばかりではなく、実際にトゥカン三世の足跡を辿ることは重要である。本論文の構成は以下の通りである。

第1章の「チベット仏教の歴史とゲルク派の展開」では、主にチベット仏教の歴史、中でもゲルク派の展開を概観している。チベットへの仏教伝来と前伝仏教(ガダル)、後伝仏教(チダル)、チベット仏教の四大宗派と密教、ゲルク派以外の三大宗派の特徴、ゲルク派の開祖ツォンカバとダライ・ラマ、清朝下のチベット仏教、ダライ・ラマとパンチェン・ラマ等を中心に、トゥカン三世の『一切宗義』の内容と関連させて年代を追いながら、チベット仏教を俯瞰している。

第2章の「ゴンルン寺とトゥカン転生活仏系統」では、ゲルク派のアムド地方布教、遼北地方の諸寺の拠点僧院、トゥカン転生活仏系統の転生譜、『トゥカン三世伝』という4節に分けて、それぞれ、トゥカン転生活仏系統の起源、トゥカン転生活仏の系譜およびゲルク派のアムド地方での布教の様子を検討している。トゥカン転生活仏系統の拠点僧院とも言うべきゴンルン寺の歴史と現状は今までにない成果であろう。また、チベット語文献の『トゥカン三世伝』とは何か、誰が執筆し、どのような章立てになっているかなどを詳しく紹介している。

第3章の「トゥカン三世の転生活仏の認定と教育」では、トゥカン三世の転生活仏の認定と、トゥカン三世の活仏教育という2節に分け、主に『トゥカン二世伝』と『トゥカン三世伝』に基づいて、トゥカン三世の認定、受戒とチベット仏教の顕教と密教の教育状況を詳細に検討している。特にゲルク派はどのようにして転生活仏制度を採用したのか、このシステムはどうなっているのか、アムド地方へのゲルク派の布教は何時始まりどのような特徴があるのか、さらにアムドとチベット中央との寺院の関係はどうなっているのか、これらの問題点を順次解決していく手法を用いながら、トゥカン三世個人の生涯を軸に、彼を取り巻くチベット仏教の社会状況を表面化させている。

第4章の「トゥカン三世の駐京と「政教一致」の下で生きる転生活仏」は、トゥカン転生活仏とチャンキヤ転生活仏との関係、トゥカン三世が京師に駐錫した様子、チベット仏教の特徴である「政教一致」の3節に分けて考察を加えたものである。チベット語の『トゥカン三世伝』の必要箇所を日本語に翻訳し、トゥカン三世の上京とアムド地方での布教の状況を明らかにし、さらに清朝のチベット政策、およびこの政策の下でチベット仏教活仏の布教の状況を検討している。

第5章の「トゥカン三世『一切宗義』の思想」では、トゥカン三世が著した『一切宗義』に関する現在までの翻訳と研究の内容を詳しく紹介している。『一切宗義』の思想的側面では、サキヤ派、チョナン派、ゲルク派の思想的特徴に触れ、顕教ではゲルク派の「中観帰謬論証派の空思想」について詳述している。さらに密教では、「生起次第」と「究竟次第」の両方を重視するゲルク派と、それを援用するトゥカン三世の思想的特色を解明している。トゥカン三世はチベット仏教の各宗派の思想内容をなるべく客観的に紹介しようと努力しているが、自身の所属するゲルク派の価値観まで捨て去ることは出来なかった。これが彼の仏教観の限界であろうと、申請者は結論づけている。

第6章の『「一切宗義」「儒・釈・道の章」について』は、『一切宗義』「中国儒釈道教」を翻訳し、トゥカン三世の中国の儒・釈 [=仏]・道の三教に対する認識の程度を詳しく紹介したものである。中国の儒・釈・道の三教がチベット文化にどの程度影響を与えたかも申請者は解明している。また、チベット文化の発展と、道教のような漢文化とチベット文化との交流の様子をトゥカン三世の目線で紹介している。さらに中国仏教の歴史をトゥカン三世がどの程度理解していたかも紹介している。

以上の6章を通じて、トゥカン三世の生涯と思想を詳しく検討し、その上で、チベット仏教の歴史、清朝のチベット政策、チベット仏教の転生活仏制度、チベット仏教の活仏教育、アムド地方におけるチベット仏教などの内容を深く研究している。本学位請求論文は、18世紀のトゥカン三世を取り巻く、チベット仏教世界の状況を明らかにした画期的なものであると言えよう。

(3) 審査結果の要旨

トゥカン三世についてはこれまでまとまったものがなく、本論文は彼の生涯と思想をあつかった大著である。三世はチベット仏教の思想を熟知していただけでなく、清朝の対モンゴル、チベット政策に大きく寄与した。申請者はトゥカン三世の思想的、政治的側面を十分に理解し、それを体系的に説明している。ただ論文の完成を期するため、気付いた点を若干記す。

1. 表記の不統一がみられる。例えば、232頁[4行目『Rje...』の『』は取るべきであろう。またここではRjeと初めの文字が大文字になっているが、同頁下から6行目では『rje...』と

あり不統一である。日本語文献の表記もスペースの取り方に不統一が認められる。

2. 参考文献の所在に対する言及が欠如している。チベット語参考文献を実際に見たい時に表記が不親切である。『トゥカン全集』10巻はデリーから出版されているが(愛知学院大学にも所蔵されている)、これに対する言及や、アメリカ国会図書館の番号(日本でカタログが出版されている)、マイクロフィッシュ版(これも日本でカタログが出版されている)に対する言及もない。
3. 方法論の問題
要旨に「宗教学、歴史学、社会学、文化学、文献学、フィールド調査などの理論と方法を総合的に用いた」とあるが、著者が宗教学、歴史学、社会学、文献学などの分野・方法をどのように理解しているのか。論文にどのように総合的に用いられているのかははっきりしない。むしろ「宗教学、歴史学、社会学、文化学、文献学、フィールド調査などの理論と方法を総合的に用いた」といわない方がよいのではないか。
4. 個々の概念や名称について
「ガウタマ・シッダールタ」(p. 209)は仏滅後数世紀経って生まれた名称であり、「雑密」「純密」は今日では使われない方向にある。

以上の他にも、細かい修正箇所があるので、大至急対応してほしい。ただこれらの点は彼の博士号請求論文としての価値を損なうものではない。

さらに、論文の構成の点から批判すると、

1. トゥカン三世とその時代
トゥカン三世(1737-1802)の生きた時代は清朝の乾隆皇帝(1735-95)の生きた時代とほぼ同じであり、清朝が隆盛を極めている時期であったが、清朝が様々な問題を抱える19世紀は間近に迫っていた。トゥカン三世はチベット及び中国の仏教のみではなく、道教や儒教に対しても造詣は深かったが、トゥカンはチベット、蒙古、中国のグローバルな歴史観を有していたのか。さらには彼の生涯と思想とが彼の後の時代に影響を与えることがあったのかなどの、展望をすこし語ってほしかった。
2. 『トゥカン三世伝』等の文献の日本語訳
トゥカン三世の伝記や、ゴンルン寺誌などは、必要に応じて部分的に本論文に引用されている。しかし、全体的にはまだまだこれらの文献が十分に論文中で紹介されているとはいえない。今後、これらの文献の全訳と詳細な注を日本語で出版していただきたい。そうすれば、多くの日本人研究者のみならず、世界の研究者が当時の清朝の政治状況を知る上で貴重なものとなるだろう。今後より一層の精進を期待したい。

(4) 語学試験の結果

平成28年5月25日に行われた博士候補者試験において、申請者は「英語 I」、「サンスクリット語」の両科目に合格し、学位論文請求の資格を満たしている。

(5) 口述試験の結果

令和元年7月12日(金)午後3時から4時30分にわたって、文学部宗教文化学科共同研究室にて、審査員4名は、論文提出者の呂其俊氏に対して、論文内容に関する試問を行った。各委員の質問に対して、論文提出者からは適切な解答を得た。

(6) 結論

以上の審査結果に基づき、呂其俊氏の本論文は、愛知学院大学学位規則第3条第3項により、博士(文学)の学位を受けるに値すると判断し、本学位請求論文を合格と判定した。

令和元年7月12日

主査 愛知学院大学 教授 引 田 弘 道

副査 愛知学院大学 客員教授 伊 藤 秀 憲

副査 愛知学院大学 教授 林 淳

副査 国立民族学博物館名誉教授 立 川 武 蔵